

令和6年度 岡山大学教育学部附属幼稚園 学校評価書

学校教育目標	自主自律 豊かな心でたくましく ～自分から自分で自分へ 人とともに人のために～						
めざす子ども像	のびのびと自己を表現することも 自分も相手も大切にすることも たくましいこども（生活力のあるこども）						
第4期中期目標	「地域のモデル」となりうる、現職教員研修の地域拠点としての人材育成機能を備えた、教員の確かな養成主体としての附属学園						
園長	井山 房子	学級数	6学級	園児数	108人	教職員数	18人
学校関係者評価委員	西山 修, 森元 真紀子, 尾上 幸久, 森川 雅弘, 若林 昭吾, 松井 絵梨子						

【1. 前年度の評価と課題を踏まえた現状分析】

<p>①保育改善・幼児理解では、幼児の主体性を育むために「自己決定」を支える「環境づくり」を意識した保育実践を進めている。幼児の学びや育ちを保護者に伝えてはいるが、保護者にとっては分かりにくかったり、適時でなかったりすることが課題である。</p> <p>②教育研究・幼小中一貫教育では、「対話」を意識してきたことで、幼児一人一人の思いをより丁寧に見取ろうとしたり、知ろうとしたりすることにつながった。教師の指導や幼児の育ちをより意識した指導をするための、評価しやすい仕組みづくりが必要である。また、全職員が同じ思いで保育をすることが大切であるが、特に、副担任や教育支援員との連携を深めるための時間の確保が難しかったという課題がある。</p> <p>③教師教育・教員研修では、教育実習では、学生の実習後の教職志望度は向上している。しかし、日々の記録や指導案等の負担感がある。研究会については、市内公立園の参加が少ないという課題</p>	<p>を抱えている。園の取組、指導が教師の資質向上、育成につながらないという現状を踏まえた本格的な見直しが必要である。</p> <p>④保護者・地域連携では、大学教員による出前授業を実施した。計画的な実施が課題である。子育て支援では、保育時間の延長や、弁当日、外注の弁当日の増加、自家用車通園の導入により、通園のしやすさにつながっている。預かり保育を実施したり、保護者連携を深めたりして、一層の子育て支援への取組拡充が必要である。</p> <p>⑤環境整備・安全管理・業務改善では、教師が働き方改革を意識して業務に取り組んできたことで、職員の心理的負担や働きやすさを整えることにつながっている。時間外勤務時間数は減少傾向であるが、依然として長時間になっている。</p>
--	--

【2. 自己評価】

評価領域	重点課題	具体的方策	成果指標・評価基準	達成状況の分析	評価
①保育改善・幼児理解	成長の様子を子どもの姿を通して保護者に分かりやすく伝える	○学年だよりの記載方法の工夫 ○お話し時間の伝え方の工夫 ○降園連絡時の伝達方法の工夫	教師・保護者アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	すべての教師が保護者に分かりやすく伝える工夫をしてきた。そうしたことで、保護者からも成長の様子が分かりやすく伝わっているという肯定的評価が95.2%だった。	4
	幼児の主体性をより豊かに育む	○幼児の思いを見取る ○環境に自分から関わるのを待つ ○思いや願いに合わせて環境の再構成	教師・保護者アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	教師は各学年の目指す姿に向かって育っていると評価している。また、保護者は、園が子どもの主体性をより豊かに育むための努力をしていると100%の肯定評価である。	4
②教育研究・幼小中一貫教育	保育評価シートを活用して保育実践を行う	○保育評価シートを活用した振り返り ○「環境づくり」を視点に評価・反省 ○二ヶ月に一度のカンファレンス	教師アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	保育の中で「環境づくり」を意識した関わり、視点をもった振り返り、カンファレンスの中で保育評価シートの視点で話し合うことが多面的な幼児理解につながったと全職員が肯定的な評価をしている。	4
	担任や副担任、支援員、特別支援コーディネーターと一貫性のある指導を行う	○研究内容の共通理解 ○個別の指導計画を紙面で共有 ○連携を深めるための時間の確保	教師アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	副担任や教育支援員とは、個別の指導計画の紙面共有はしていないが、個別の指導が必要な幼児への関わりについての話し合いができており、指導の一貫性が保たれていると全職員が感じている。	4
③教師教育・教員研修	教育関係者の研修の充実・改善	○プレ公開日の設定 ○参加者の自家用車利用 ○案内を市内の小中学校に送付	昨年度からの申込人数比 4 (120%以上) 3 (110%以上) 2 (100%以上) 1 (100%以下)	参加者は106名。市内小学校からの参加者は幼小から5名の参加のみ。また、研究会前日にプレ公開保育を実施し、13名が参加。市内幼小からの参加が伸びなかった。	3
	教育実習の充実・改善	○記録書類の削減 ○実習生が自由に使える時間の確保 ○全体常会の講師資料を配布	教師・学生アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	実習記録の記入量を削減し、実習生の負担軽減を教員も実習生も共に感じている。7年度からの実習生の定員増に伴い、職員の負担軽減に向けた実習記録の見直しや精選をさらに進めていく。	4
④保護者連携・地域連携	保護者への幼稚園教育の理解を促し、連携を密にする	○お話しタイムや個人懇談の実施 ○学年だよりを読んでの感想や質問を提出してもらう ○個々の保護者の課題を理解した対応	教師・保護者アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	降園時に個々の保護者に声を掛けて課題があるため、教師に声を掛けやすい雰囲気づくりができていますと評価した教師は87.5%であると考える。また、運営方法等の変更の際には、保護者に向けて丁寧な理解を得られるような説明が不足していた。	3
	大学との連携	○大学教員による出前授業等を実施	保護者アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	出前授業が幼児の豊かな体験になっているかどうか、分からないという保護者評価も見られた。出前授業の経験が幼児の生活にどのように生かされているかを学年だより等で知らせることが必要であった。	3
	子育て支援	○自家用車通園の導入 ○預かり保育の実施 ○外注弁当日（なかよしランチ）の増加	保護者アンケートの肯定的な回答 4 (95%以上), 3 (90%以上) 2 (85%以上), 1 (80%以上)	預かり保育については多くの利用があり、ニーズの高い取組であった。また、外注の弁当は、12回実施し、幼児の食への関心を高めたり、いろいろな食材に触れたりする機会にもなった。	4
⑤環境整備・安全管理・業務改善	老朽化部分の改修・修繕	○保育室・テラスの雨漏り修繕 ○保育室の扉の修繕 ○排水管の修繕	改修・修繕の終了箇所 4 (3か所) 3 (2か所) 2 (1か所) 1 (0か所)	年度当初に挙げた箇所の改修・修繕は完了した。しかし、水道の修繕、保育室の扉の修繕（開閉しにくい部分）が新たに出てきた。園庭側のカーテン設置、遊戯室の照明改善はできておらず、保育にも支障をきたすことがあり、急を要す。	2
	職員の働きやすさの改善	○月に一度以上の定時退勤日の設定 ○業務内容の見直しや委託 ○業務のICT化	平均時間外勤務時間の昨年度比 4 (80%以下) 3 (85%以下) 2 (90%以下) 1 (95%以下)	月の平均時間外勤務時間は、約45時間（担任団だけで見れば、約50時間）で、月昨年度比平均は72.78%である。しかし、家庭への持ち帰り業務がまだ見られている。	4

【3. 学校関係者評価】

取組状況に対する意見・要望等	評価
子どもの様子を伝える際に写真を多く使うことで、分かりやすさにつながっている。また、ドキュメンテーションを通して他学年の取組を知ることができ、よい取組であった。	4
アンケートの評価から、子どもの主体性が育まれていることが見受けられる。また、保護者は、子どもを見守ることに難しさを感じているようであるため、園が家庭で実践しやすい具体的な手立てを知らせることが大切なのではないか。	4
附属の特色である1年生との共同活動や附中交流等、幼小中の連携は引き続き実施してほしい。附属ならではの経験ができるという点を、積極的に外部へアピールしたほうがよいのではないかと考える。	4
ブレ公開保育は研修の機会を広げる良い取組であった。研究主題は5年前の問題を見据えて、大学と連携を図りながら、幼小連携につながるようなものとするよいのではないかと考える。学生との関わりがたくさんできることは本園の強みである。学生と触れ合うことのできる機会を大学と連携して多く設けてほしい。	4
保護者の多くは職員の温かい雰囲気を感じている。保護者には、子どもの具体的な様子を公平に知らせてほしい。大学との連携については、課題解決のための具体的方策が乏しい。研究支援、物的・人的な資源の活用等、様々な項目を挙げ、大学資源を多く引き出してほしいのではないかと考える。大学附属であることが強みであり、全学附属化されることでより多様な方策を挙げることができ、大学に附属幼稚園の存在をアピールしていくことが大切である。預かり保育の開始は、地域から好意的に受け止められている。	3
老朽化部分の改修・修繕は実施しているが、それ以上に新たな修繕・改修箇所が出てきている。大学への要請を継続しながら、施設管理を行ってほしい。教師の働きやすさの改善は、よい方向に向かっていると思うので、引き続き頑張してほしい。	3

【4. 総括と次年度の重点課題】

<p>【総括】業務改善を図りながら、保育・研究・実習という本園の使命を果たすことは、概ねできていると考える。附属幼稚園の取組や魅力を保護者や地域等の外部に向けてどのように発信していくのがよいか今後も検討していく必要がある。また、来年度より実習カリキュラムが新しくなり、実施時期や受入人数が変わるため、実習内容の見直しを図ることで、保育業務により時間を費やすことができると思われる。一方で、大学との連携に課題を残しており、全学化の強みを生かし、研究支援や資源活用について考慮する。</p>	<p>【次年度の重点課題（※大学への要望を含む）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老朽化部分の改修・修繕を大学へ要望 ・平均時間外勤務を40時間未満（月平均5～10時間減）にする。 ・保護者や地域等の外部に向けた発信方法の工夫（降園時の声掛け、学年だより、HPの活用） ・実習業務、入試業務の見直し ・大学との連携を深める具体的方策の確立
---	---